SPRING2008

esprit

日本武道学会剣道専門分科会会報2007

■会長挨拶
剣道専門分科会会長　杉江正敏（大阪大学）ページ１
■剣道コラム
「武道必修化」剣道専門分科会副会長　巽 申直（茨城大学）　ページ２
■剣道専門分科会研究会報告
「戦前における武道教員養成の研究」　佐藤宏拓穣（柏木学園高等学校）ページ３
■剣道専門分科会企画フォーラム
「形剣術と竹刀剣道—斬突から打突その身体技法の系譜—」講師 作道正夫（大阪体育大学）司会 杉江正敏（大阪大学）　ページ４
■平成１８年度一般会計決算書，平成１９年度一般会計予算書　ページ１１
■事務局だより　ページ１２

会長挨拶

日本武道学会剣道専門分科会会長
杉江正敏（大阪大学教授）

■剣道専門分科会企画フォーラム

昨年の分科会企画フォーラムでは、「御挨拶」で紹介させていただいた作道正夫氏による「形剣術と竹刀剣道—斬突から打突へ　その身体技法の系譜—」と題する提言を中心に、大保木輝雄氏（直心影流）・小林義雄氏（一刀流）などの古流体験者の意見をまじえて、また、会場参加者からも鋭い質疑が出され活発な論議がかわされました。作道氏の深い探求心に裏付けられた実践的修行論は多くの参加者に感銘を与えたものと思われます。

このフォーラムの模様は「分科会会報」で紹介されますが、「向こうの竹刀が来て摺り上げる場合でも、このふくらみの中で向こうの太刀をこっちにこうやって、打った瞬間にパッと摺り上げるのです」「そのまま咽頭に付け振り上げていく。いつ突くか分かりません。ゆさぶられて最初に動いたら終わりで、私は清野先生にグッと入れられて勝手に振ってしまったこともあります」などと、実演をまじえて作道・大保木・小林三氏の間に交された論議の内容は、文章では伝わらない熱と迫力があったことを申し添えます。同時に、われわれの学会の命題は、基礎的研究の蓄積とともに、実践的研究や指導法の開発にあることを再確認した次第です。

この企画が始まってからは、通常の学会発表では、なかなか表現できない実演をとりいれる試みがなされてきました。これはこれからも是非、継承してゆきたいことだと考えます。学会発足の頃には、森田文十郎先生や富木謙治先生の演武や身振りを取り入れた御発表や御講演があり、とても興味深く拝聴（見）したたことを思いおこしました。

■中学校における武道必修化

昨年、「幼少年に対する普及奨励と指導法」と題し、小学校武道のあゆみを歴史的に回顧しましたが、いよいよ標記のテーマが平成２４年度から実施される運びとなってきました。この問題に関する識者の意見を散見するところ、歓迎しつつも教材の配当次第では武道離れの生徒を生み出すのではとの懸念が表明されています。もうすでに指導案の策定がすすめられているように聞き及んでおりますが、先の懸念が払拭されるような原案が示されることを期待しております。

しかしながら、先の幼少年指導のところでも申し述べましたが、児童・生徒に剣道に対する興味を失わせないようにしながら、なおかつ「剣道の伝統的文化性が損なわれない方向」で指導するということは、なかなか難しい課題と思われます。興味付けの導入から先の展開は、各人が工夫をこらしているところではないでしょうか。

最後に、フォーラムで作道氏が講演抄録で引用された森政弘氏の「継承なき創造は稚拙の域を出ない」そして「創造なき継承は形骸化の域を出ない」の言葉を噛みしめながら、分科会会員各位の研究の成果が結集され、剣道で逃してはならない「継承」すべきものは何か、を検証しながら、大胆な「創造」がなされることを祈念して御挨拶といたします。

剣道コラム

武道必修化

剣道専門分科会副会長
巽　申直（茨城大学大学院教授）

学習指導要領の改訂にともない、小学校、中学校及び高等学校の学習内容の改善・充実の取り組みが進行しています。中学校「保健体育科」体育分野では、第１学年及び第２年を通じ、選択であった「武道」、「ダンス」を含めて、８領域すべてが必修とされ、平成24年４月１日　から全面実施となります。

これまで中学校の体育分野８領域（体つくり運動、器械運動、陸上競技、水泳、球技、武道、ダンス、体育に関する知識）の内、武道とダンスのみが選択必修であったことを考えれば、見方によっては特別のことでもないかと思われます。

学習指導要領は、教育基本法の教育理念、学校教育法の規定を踏まえて改正されます。

武道の必修化に大きく影響を与えたのは、教育基本法改正により、教育の理念として、新たに規定された公共の精神、伝統や文化の尊重などを踏まえ、伝統や文化に関する教育や道徳教育、体験活動等を充実させることが背景の一つにあります。

今回の教育内容の主な改善事項として、７項目（言語活動の充実、理数教育の充実、伝統や文化に関する教育の充実、道徳教育の充実、体験活動の充実、小学校段階における外国語活動，社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項）があげられていますが、特に、伝統や文化に関する教育の充実では、「①国際社会で活躍する日本人の育成を図るため、各教科等において、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、それを継承・発展させるための教育を充実。②具体的には、国語科での古典、社会科での歴史学習、音楽科での唱歌・和楽器、技術・家庭科での伝統的な生活文化、美術科での我が国の美術文化、保健体育科での武道の指導などを充実」と提示されており、この中に、武道の必修化の大きな理由を伺い知ることができます。伝統や文化に関する教育の充実を図る上に、体育分野では、武道が期待されているものと捉えられます。と同時に、この主旨にそって、武道指導を振興することが重要となります。

次に、中学校「保健体育科」の改訂のポイントをみてみます、提示案は、「①健やかな体の基礎となる身体能力と知識を定着させ、運動を豊かに実践していく観点から、発達の段階に応じた指導内容の明確化・体系化。②多くの領域の学習体験をさせた上で、自らに適した運動を選択できるようにするため、第１学年及び第２学年を通じて、選択であった「武道」と「ダンス」を含めて、すべての運動領域を必修化」とされています。そして武道の「内容」をみると、「(1)次の運動について、技ができる楽しさや喜びを味わい、基本動作や基本となる技ができるようにする。

ア　柔道では、相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技を用いて、投げたり抑えたりするなどの攻防を展開すること。

イ　剣道では、相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技を用いて、打ったり受けたりするなどの攻防を展開すること。

ウ　相撲では、相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技を用いて、押したり突いたり寄ったりするなどの攻防を展開すること。

(2)武道に積極的に取り組むとともに、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすることなどや、禁じ技を用いないなど健康・安全に気を配ることができるようにする。

(3)武道の特性や成り立ち、伝統的な考え方、技の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取組方を工夫できるようにする」となっています。

従前に例示されていた試合の内容は、３年次の選択で取り扱われるようになり、必修では、基本を中心した内容に変更されていることに大きな特徴がみられます。

これまで、限られた時間の中で、「攻防の楽しさを味わせる、試合をできるようにする」などのねらいを達成するには、指導上、困難が生じていたことを考えれば、かなり精選された内容となり、体育科教員にとって、指導可能な内容の例示といえます。しかしながら、この内容で、本当に、武道の特性を味わわせることができるかは、今後の課題となるでしょう。

最後に、現状の武道が選択で実施されている履修状況をみると、都道府県によって異なるものの、柔道の履修率が圧倒的高いのが実状です。武道必修がイコール柔道必修とならないようにするためには、剣道の果たす役割に大きな期待が寄せられていると思われます。残念ながら、現段階では、今回の必修化に伴う人材確保、予算的措置についての行政からの新たな案は、何も示されていません。恐らく、全て、現状の中で対応することになろうかと思われます。剣道を専門としない体育科教員にとって今回の必修化は負担増になることは避けられない状況にあると推測されます。他の運動領域と同様に剣道指導が充分にできるための支援を日本武道学会及び剣道専門分科会等がどれだけできるかが大きな課題となるようです。

剣道専門分科会研究会

戦前における武道教員養成の研究

佐藤　宏拓穣（柏木学園高等学校）

日時：平成19年11月2日
場所：明治大学駿河台校舎研究棟
　　第２会議室

平成１９年度の研究会は、年度の学会賞を受賞した佐藤宏拓穣氏を講師に招き、研究会が行われた。発表の要旨は次の通りである。

第一部
戦前における武道教員養成の研究

本研究は、國士館専門学校を中心とした戦前の武道教員養成の実態を明らかにした。その結果以下のことが明らかとなった。

① 國士館専門学校は、武道教員養成校としては、17年間（1929年－1945年）という短い期間ではあったが、毎年50～90名近くの卒業生を輩出した。毎年の卒業生数は高師や武専の２～３倍の数字を示しており、総数でも両校を上回っていた。

② 短期間で多くの武道教員を輩出した背景には、体操教員のなかでも、特に武道教員が不足していたためである。例えば、昭和13（1938）年現在、中等学校の「剣道」「柔道」の有資格教員の充足率は約60％と低く、中でも私立の中学校では30％に満たない状況であった。こうした深刻な教員不足を乗り切る方策として國士館に白羽の矢が立てられ、専門学校として位置づけられた結果であったといえよう。

③ 昭和21（1946）年３月には剣道、柔道の教員免許状が失効し、多くの武道教員は教壇を去ることとなった。そのため、國士館専門学校の卒業生においても「国語」もしくは「漢文」の教員免許状を持っていた者のみが学校を去らずに済んだが、その実数については残念ながら今回の調査では明らかにできなかった。この点については、武専の武道教員養成とともに、今後の課題とするものである。

第二部
戦前における武道教員養成校の研究
-追跡調査について-

本研究は、武道教員養成校の卒業生動向について明らかにした。その結果以下のことが明らかとなった。

① 武専は、中学校への就職が高師や國士館の２校に比べて約２倍という数字を示していた。また、師範学校への就職についてみるてみると、高師では数的確保ができなかったため、武専がそれを補完するということで重要な役割を果たしている。その他、警察・武徳会支部への就職も多く、一つの特徴といえる。

② 國士館は教員養成を開始してから昭和13年度までの短期間にもかかわらず、卒業生数を多く輩出している。ただ、その多くは外地の中等学校や公共機関（官公庁）に行っており、軍関係が多いのも特徴である。

③ 高師は教員養成の直接養成校であるため、就職先は学校関係が主であった。中等学校のみならず、小学校、高等・専門学校、大学または兵学校など、あらゆる教育機関へ就職している。また、外地においても学校関係が主な就職先で、内外地とも軍関係への就職はわずかしかいない。

今後の研究課題として、昭和14年度から昭和20年度までの戦時下における卒業生の動向については今回の調査では明らかにすることができなかった。また、昭和20年の終戦によって武道教員免許状が翌年失効されたことによる武道教員の動向についてはともに今後の課題とする。

日本武道学会第40回大会
剣道専門分科会企画フォーラム

形剣術と竹刀剣道

斬突から打突その身体技法の系譜

講師　作道正夫（大阪体育大学教授）
司会　杉江正敏（大阪大学教授）

日時：平成19年8月31日
場所：東海大学高輪校舎

※　本稿は、『武道学研究』第40巻第3号にも掲載されておりますが、剣道分科会のみ所属の会員もおられますし、また会長挨拶にありますように、大変活発な意見交換・質疑応答がありましたので、本会報においても、全文を掲載いたします。

杉江　剣道専門分科会では、一昨年、地域に根付いた「木刀による稽古法」を実践されている平尾先生から、その方法をお話しいただきました。昨年は、先ほどもご紹介がありました加藤先生を中心として、東京都剣道連盟の方々の取り組みについて、実際に「法定」の型をお示しいただきながら型の意義について話を深めていきました。

実は、「もういいのかな」という感もありましたが、やはり「まだ足りないな」との思いもあったところ、「剣道指導の心構え」というのが全剣連で制定され、その制定の経緯・経過の説明の中で、ご承知のように作道先生から現代剣道と型、もしくは刀法と竹刀操作についてのお話がありました。

私が第1回で述べさせていただいた中で歴史的な経緯を見ると、「形のみを修練する」、「形の修練を補完する意味で竹刀剣術をする」、その後、幕末から明治20年代頃までは、「形を知らない剣術使いがいる」との記述があるように、竹刀剣術中心の時代を経験しました。そのような状況の中、もう一度「形」と「刀法」と「竹刀操作」を一致させようという努力を先人が示してきた経緯の中で、「形」と「竹刀操作」は練習をすれば身に付くものだとされがちですが、実際は具体的にどこがどのように一致するかについては、自信がありませんでした。ところが、作道先生のご研究と実践の中で「7ー8割は検証できる」とのことでした。先生はたいへん鋭い直感をお持ちです。ぜひ、この「7ー8割の中身」をお伺いしたいものだということで、この企画を立案させて頂きました。

作道先生には、お忙しい中を快くお引き受けいただき、お話と実技をしていただく中で、7ー8割の中身をぜひお聞きしたい、また、お見せいただきたいと思います。それでは、ただ今から「形剣術と竹刀剣道」ということでお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

作道　みなさん、こんにちは。学会も最終日ということで、連日連夜、お疲れのことと思います。最後に少し、日常的な自分たちの修練に立脚して、先生方と意見の交換ができればと思っています。

今、杉江先生からご紹介がありましたが、タイトルは「形剣術と竹刀剣術」を主題にします。このように大きなタイトルはとてもではありませんが、自分の修練の中からお話ししきれないかもしれません。しかし、古流の問題や日本剣道形について、私どもが尊敬する清野武治先生は「少なくとも指導者になる者は古流を教養としてたしなめ」と書き残しています。また、それができないまでも、全日本剣道連盟の剣道形を日常的に打ち込みながらを吟味し、修練して、竹刀剣道との相即性を常に説明していくことが非常に大事である、と述べられています。

私自身も「まさにその通りだな」と思いながら、古流は少々、居合も少々、剣道形に関してはそこそこといったところですので、今日は、強力な助っ人をお願いしました。大保木先生は古流の形に大変詳しく、また、今日期せずして出会ったのが小林先生で、小林先生もずいぶんと古流に詳しい方です。そのような方たちが展開されている「形から竹刀剣道へ」というより、私はむしろ「竹刀剣道の身体技法をこのように捉えたら形の問題とこうつながる」といった提案をさせていただくことが、私の使命だと思っていますので、お付き合いいただければと思っています。

武道学会に来るのは久しぶりで、この雰囲気はなかなか読めません。今の若者が「KY」などと空気が読めないことを言っていますが、そういう意味では失礼なことも多々あるかもしれません。今は夏の暑いこの時期に直角に飛び出す汗をしっかりかいて、師弟共に鍛え合わなければならない大事な時期だと思います。ちょうどこの学会の時期は、毎年たいてい合宿・遠征というように過ごしています。そういう意味で、空気が読めない作道ですが、よろしくお願いします。

お手元に資料が届いているかと思いますが、先ほど杉江先生からご紹介がありましたように、全日本剣道連盟の長期構想企画会議で約5年間にわたり、「指導の心構え」を時間をかけて論議してきました。そうでないと、「理念」と「修錬の心構え」が空を飛んでいるぞ、これを毎日の日常線までつなぐことを、今こそ全剣連は全力を挙げてやらねばならないということで、その会議が５年にもわたって続いたわけです。その中で今日もお見えいただいていますが、加藤先生が、我々、若造の幹事のまとめ役のような形で、森島先生以下、数人の大先生も一緒になってやる親会議に向けて、たたき台を構成して提出しました。そこから意見をお聞きしてまた練り直し、また提出するという作業を1年半にわたって繰り返し、ようやくこの春に制定を見たわけです。みなさんの中にも、その心構えの非常にシンプルで短い文面を見ながら、どういうことなのか、もう少しその裏側にあるものを説明してくれ、との思いがおありだと思います。このことはメインにすべきではありませんが、そういう意味で、少しかいつまんで説明をさせていただきたいと思います。

(1) はじめに

まず、「はじめに」とありますように、全日本剣道連盟は、「長期構想企画会議」にお

いて懸案事項であった「剣道指導の心構え」を、平成15年以来の論議を経て、制定しました。昭和50年に「剣道の理念」「修練の心構え」が制定されて以来、32年の時間が経過していたわけです。

その概要と経緯については、全剣連の月刊誌『剣窓』（2006.12.1ー2007.4.1）に5回にわたって連載をさせていただきました。特にこの会議で中心となったのは、「刀」と「竹刀」の関係をめぐる論議でした。その結果、第一次会議を締めくくるに当たっては國松孝次議長が、「両論併記」すなわち「刀と竹刀はひとつにできない」と両方を併記した中で指導の心構えをまとめられました。

第二次会議は加賀谷先生が議長を務められたわけですが、そこでは「両論併記だと指導の場がうまくいかない、なんとか重ねられないか」というのが眼目となりました。その間のことは、國松議長の「時としてあたかも橋の架からない川の両側に立って、声を交わしているような錯覚を覚えたほどである」という言葉によく表れていると思います。

このように、「竹刀だ」「刀だ」というようになかなか一緒にならず、それは別個のものとして扱われてきましたが、最終的には第一次会議、第二次会議を通して、資料の傍線にありますように、全剣道史を一貫する「剣」を〈刀-木刀-竹刀〉と捉え、「双手による剣の操作」という制約性（理法）、つまり、「剣道の理念」にある「剣の理法」を〈攻防一如〉すなわち攻撃と防御が二つにならない、抜く、摺り上げる、返す、あるいは切り落とす、これも全部攻撃と防御をひとつにした攻防と捉えました。剣道は、それぞれの手に盾と矛を持って、このようにしたらこのようにする、といった剣法ではありません。ひとつの太刀をふたつの手できちっと持っているわけですから、剣道の場合、防御の太刀が必ず攻撃に変わっていくわけです。「攻防一如」という問題は、非常に大きな制約性なのです。そのような問題をまず確認

し、点と線と面（鎬）ということを、この木刀や、竹刀は丸いですが、そこでも点、竹刀の弦の反対側は線というように、ちゃんと手首を返してやるということです。「刃筋を立てる」のは、竹刀はふくらんでいますから、向こうの竹刀が来て摺り上げる場合でも、このふくらみの中で向こうの太刀をこっちにこうやって、打った瞬間にパッと摺り上げるのです。あるいは、返しも同じことで、面の表裏の鎬で刷り上げ、向こうの太刀がこうなった瞬間にパッと返す。そのような竹刀と刀の使い方の共通項という問題を、点、線、面、剣先と刃筋と鎬の表裏の使い方として初歩的に捉えることを確認していく中で、刀と竹刀の問題もなんとか歴史性を受け止めながら捉えることが出来るのではないか、という結論が出ました。

このことによって、十人いたら十人十色の刀の観念を超えて、具体・具象として刀の使い方という問題が竹刀でどう継承されているのか、あるいは竹刀という新しい武器の中で、どういうことが新しく創造されていくのか、そういう観点で考えることが非常に大切なのだと思います。こうして、理念と修練と指導とが三位一体的に機能していく道が開示されました。そして、我々がやっていくうちにキーワードとして生まれた「竹刀という剣」、つまり「相手に向かう剣」であると同時に「自分自身にも向かう剣」がキーワードとして生まれ、「自耕の剣」が標榜されました。このような中で、今回、「竹刀の本意、礼法、生涯剣道」の三つのテーマでまとめられていったものが「指導の心構え」なのです。

剣道史を俯瞰すると、〈武術（実用文化）-武芸（芸道文化）-武道（競技文化）〉と要約されます。「剣」という「武」の歴史は、常に先の文化性を継承しつつも、それぞれの時代における新たなる文化的価値を創造していく連鎖の中にあるのです。侍の時代の芸道文化期にあって、柳生の剣は「殺人刀」を下敷きにしつつ、「活人剣」への発想の転換をはかり、新境地を開発していきました。それは、すこぶる画期的な事柄でした。

現代社会にあって、この「竹刀という剣」で切り開いていく剣道が、近代スポーツ競技文化群の一員でありながらも、その文化的特殊性や、競技特性の違いを鮮明化していく国際化を推進していく切り札となることに期待したいと思います。

（2）　「斬突」から「打突」-その身体技法の系譜-

ここのキーワードは、継承という問題と創造であり、森政弘というロボット博士が「継承なき創造は稚拙の域を出ない」そして「創造なき継承は形骸化の域を出ない」と言っています。この二つのキーワードは、人間の営みの中で非常に大事なことだと述べています。この、継承から創造の中で、刀から竹刀へという歴史的な転換を剣道の愛好者がみんなして作り上げていったのだということを受け止めていく必要があると思います。

次に、この点に関して私の立場から「打突文化」の中で、どういうひとつの身体技法の捉え方ができるのか、という問題があります。もっと長い刀の時代から、どんな風に対人的な攻防の関係や固有の時間が変わってきたのか。押し切りの中で距離が遠くなってきましたが、古流から現代剣道へということの中で凝縮され、開発されてきた時間、空間をどんな風に竹刀剣道から刀剣道の問題として、我々は意識を運ぶことができるのでしょうか。

「有効打突」を競い合う剣道という運動を、人間の運動一般という枠組みで捕らえ直してみると、「移動」と「打突」という二つの運動を一体化して行う運動であると言えます。「移動」は主に下肢が、「打突」は主に上肢が担当し、上下肢の分離と統合の是非が問われるところです。

この統合運動には二つの典型があります。ひとつは「摺り足打突（待-できる）ースムーズで素早い小さな重心移動を伴う打突-」、もうひとつは「踏み込み足打突（懸-ゆける）-ダイナミックで瞬発的で大きな重心移動を伴う打突-」です。両者ともに、〈体軸の前後左右のブレ、上下動の少ない、肩の線や目線が変わらない〉等々の安定移動を獲得することによって、的確な上肢の双手打突が保障されています。近代化の中で構築されてきた打突の「身体技法」をこのような枠組みから捕らえ直してみることは、今後の指導法の展開にとって重要な意味を持ってきます。この「懸（ゆける）待（できる）一致の上達論」の構築が待たれるところです。以下、この近代剣道の「移動法」と「打突法」に至る推移を概観してみたいと思います。

① 下肢の使い方

下肢の使い方としては、『五輪書』の「水の巻」に「足づかいは、ことによりて大小・遅速はありとも、常にあゆむがごとし」と説かれています。また風の巻には「足のふみようにに、浮き足、飛び足、はぬる足、ふみつむる足、からす足などといひて、色々さっそくをふむ事あり」とあり、こうしたさっそくをふむ技巧的な片足毎の足使いによる太刀振りでは体勢の崩れることが重ねて説かれています。これは、足場が野外をはじめ不特定な条件であることからも十分に理解できます。近世に入り、この足場が道場の床場へと移行し、撃剣（竹刀打ち込み稽古法）が登場してくるに及んで、悪足とされた「飛び足、はぬる足、さっそくをふむ足」等々にも改良が加えられ、「摺り足」に加えて「踏み込み足」が中核的な技法となっていきました。

これは皆さんもよくお分かりかと思いますけれど、武蔵の時代には、足に目が付いていないと足場が不特定ですから、足場がないと自分の体勢が崩れ、相手からやられてしまう。また、自分の太刀振りも満足にできない。しかしそれが床場に変わると、ずいぶん状況が変わってきます。床場の中では、足に目をつけなくてもいいのです。

今年の冬、大阪の修道館といところで稽古をやりました。その時、ちょうど前の日に居合道をやっていて、油をたくさん使うものですから、道場がよく滑る。そこで稽古をやったら、いい踏み込み足でないと全部バランスを崩してしまうので簡単に打てるのです。その稽古が終わって大阪体育大学に行きましたら、大学も冬休みに入る前で、油を木の素地の床の上に塗って、「ゆっくり回復せいよ」とでもいうように養生するものですから、これもツルツル滑る。学生は今、パワーやスピードの中で、パッ、パパパパッとやりますから、全力を上げていて、踏み込み足が跳ね足になっても高足になって体勢が崩れていても、学生の場合は瞬間的に修復ができるのです。ところが、我々年寄りは修復ができません。崩れたら、崩れっぱなしです。修復するのに、ものすごく時間がかかるわけです。そういう中で大阪体育大学の道場でも、学生たちがツルツルスッテンとやるわけです。そこで我々は、彼らと同じような踏み込みをやらないで、踏み込みをやるけれど、高足や跳ね足にならずにコンパクトにサーッとやると、そういう床の上でも滑らずに稽古ができるわけです。そういう問題が、冬に強烈な印象として残りました。

そこで「これは何だろうな」と考えてみると、昔の先生方が「道場に豆まいておけ」などとよく言っていたのと同じことなのです。思い切った踏み込みが悪いと、必ずスッテンコロリンする。それと、我々がウレタン加工の一般体育館に行った時に、夏は汗をかいたら滑るし、冬はジンジン冷たいし引っかかるといったように、いろんな床場の違いがあります。道場になっても、フロアの床の上でもそういう違いがあるのだということを、この間、とても感じました。その中で、それではこういう踏み込み足打突ならバランスを崩さず、どのような床場でもできるのではないか、ということで、この「下肢」の問題を考えたわけです。

② 上肢の使い方

上肢では、「斬突」では主に引き斬り（円運動）技法であったものが、打突は下肢の動きとの協調統合として、主に押し斬り（並進運動-円運動と直進運動の合体）技法へと移行していくことになりますが、これはいろいろな研究でも明らかになってきた通りです。特に「踏み込み足打突」では上肢の振りかぶり、振り下ろしの大小にかかわらず、打突時に両拳を前方へ押し出すことによって打突力を獲得している。こうして、いわゆる「梃子の理」とか「物打ち」を強調する「押し斬り（打ち）」が定着化していきます。

「梃子の理」というのは、右手が押し手になって左手が引き手になるという考え方から、手の平を二つ、三つに分割して両方が押し手になりながら引き手になるというところまで、厳密には考えなければならない内容を持っています。この「移動法」と「打突法」の開発によって、遠い距離からのスピーディーな攻防を促進させ、武蔵の時代には「軽業」「曲芸」として蔑視、排除されてい

た多様な技が承認されていったのです。昭和初期の頃には、この「踏み込み足打法」が一般的となり、技術解説もなされ、市民権を獲得していきました。

だいたいこのへんの経緯は、みなさんもお分かりのことだと思います。振り返れば我々が大学院の頃、昭和44年になりますが、D.D.ドンスコイ著『キネシオロジー入門』という本が発行されました。当時はたいへん新しい内容で、大学院の「運動の科学」という研究会でドンスコイの「閉じられた鎖」や「開かれた鎖」について検討しました。両足がくっついている「閉じられた鎖」の状態だと、左膝の関節ひとつを動かそうとしても足首や腰まで動きます。非常に運動そのものが安定感あるものの、全部が連動する拘束感があります。

それと比べて、例えば野球のピッチャーが投球の時に手首のスナップを効かせることで変化球を投げる時には、各関節の働きが全部連動していきながら、最後は手首で球種を変えます。手首の関節はひとつで動かすこともできれば、そのように連動させることもできます。「開かれた鎖」は不安定ですが、いろいろな動きに対応できることをいいます。この二つの鎖が連動しながら、人間の動きが展開されているというわけです。

これを読んだ時、「剣道に当てはめて考えてみよう」と、みんなで夢中になったのです。その中で、もう一つドンスコイが言っているのは、末端部にギュッと力を入れると、見た目には開放環のようなのだけれど、ひとつの棒になり閉鎖環になるということです。見た目は開放環でも実は閉鎖環であるような動きを、大学院の連中は夢中になって考え、剣道に適用して考えていったのです。

それは、レジュメに戻りますと次のようになります。

この理論を剣道という運動に適用すると、①「すり足」-「閉鎖環のスムーズなズラシ」（安定的）、要するに、閉鎖環のままで状態を安定させて運動する。閉鎖環をずらすというように「すり足」を考えるのです。非常に小さな重心移動を、目線も肩の線も重心も変わらない中でやっていくのです。閉鎖環のずらしで「すり足」が考えられるということです。

次が、踏み込み足打突です。②「踏み込み足」-「開放環（不安定）・形成時に末端部関節（右足首）を切り返すことによって瞬間的に閉鎖環を形成する（空中固定－安定化）をはかる（見た目には開放環ではあっても、瞬間的に閉鎖環としての機能を発揮する）。これを我々は「動的閉鎖環の形成」と命名したわけです。

「三角矩の構え」もトータルに見ればそうかもしれませんが、左半身のつながりがきちっとして、踵が床を踏み付けるのではなくしっかり降りていって、膝に自分のハセ（腹背）をしっかり乗せ、足がヘラッとならずに両方の膝でハセをしっかり運んでいくのです。その問題が上まで上がっていって、左の肩が下がり、スルッと巻き落とされていく。左のラインがピチッとして左拳がおさまっている。このラインがあって、右の踏み込み足の問題がこの膝の腰の運びと連動してあるのです。そういう意味で、「閉鎖環」から「開放環」になっていく過程では後方に控えている左半身が非常に大切で、これがあることの中でハセがへっこまないし、軸が垂れ込まないし、足が跳ね足にならずに高足にならない。自分のハセがそのままドンといくし、軸が変わらない形なら踏み込み足がドンとできる。みんなで、いい踏み込み足とはどんなものか考えたのです。それはドンスコイから言えば、踏み込みが左の足が軸足になっていって、右足が踏み込まれていって、足をグッと前に持っていくことで腰が引っ張られていく。踏み込んでいって引っ張っていくのですが、高足になってしまうとお腹の力が抜けます。このラインが全部変わってしまうからです。だから、このままのラインで全部行くためにはこの右の上げ方と左との連動が肝心です。右足の持っていき方は、膝から持っていって足首を返しながら前へ持っていくと、腰がグッときてこの軸が変わらない形で前へ持っていける。このような形で、腰の前への移動を瞬間的に大量に作っていって、安定した形の中でパッと踏み込んでいく。そのような内容です。これが、ドンスコイの中の「見た目には開放環ではあっても、末端に力を入れると機能的には閉鎖環になる」ということです。

右足首が空中で固定したまま放り出されてしまうと、固定されたものがすぐ踏み締め足になっていきますから、そういう意味で大きな重心移動を瞬間的にやりながら軸がぶれず、肩の線が変わらないのです。右から行くのではなく、左のラインで右は添え手のままで行ける、「三角矩の構え」の内容のようなものがそこにはあるのです。ドンスコイの考え方から踏み込み足打突の問題を考えると、膝から持っていって高足にならずに足首が変わることの中で、左の足との膝で持っていく腰を運んでいくのを、もっと前に持っていくことが瞬間的にパッとできて踏み込んでいけるのです。そうすると、豆を撒いているように床が滑るところでも形の崩れが少ないフォーメーションになります。

防具剣道の中での結合運動の二典型が、踏み込み足と摺り足になります。摺り足についてはみなさん、素振りなどで十分納得がいくでしょうが、踏み込み足打突の初心者指導においてこの形状記憶装置をフルに回転させないといけません。踏み込み足において、軸が倒れ込んでいくような高足や跳ね足を間違えて覚えてしまうと、あとあと苦労をすることになります。踏み込み足で空中に足が行く時に、瞬間的に空中固定をする動作をダイナミックに動的な動きで行うことで動的閉鎖環の形成につながります。

我々が指導の中で考えなければならない問題は、移動と打突、あるいは移動と刀法といったように移動と斬突の結合運動として捉える必要があります。左のかかと、膝、腰、肩、肘などの裏筋に入っていかなくてはなりません。右手は添えるような構えを連想していただければいいと思います。この左のつながりをきちんとして、右足の膝から足首を切り返しながら前方へ押し出し、瞬間的に空中で固定する。同時に引き起こされる左〈拳―肘〉の前方への押し出し（振りかぶりの大小はあっても）が連動し、上下肢の強調によって的確な打突が完結するのです。

「高足」「はね足」の克服、循環的運動（構えから発して構えに至る）というのが、非常に大事な問題です。切り返しも打ち込みも、構えから発して構えに至る。その間はできるだけ構えの内容を全部持っている状況でなくてはなりません。「体軸」「肩の線」「目線」がぶれない等々の必須条件を満たすことが、この「動的閉鎖環」形成の命題となります。態勢が崩れても当てることはできます。が、有効打突の問題は、結果だけではありません。的確に当たった結果が、どういう過程で形成されていったのか、機会も態勢もすべてが判断され、「いい打突だ」ということになるのです。踏み込み足の問題が非常に安易に扱われている現在では、ますます大切なことです。

先だって、秋田国体選手の練習の一部に踏み込み足打突の修正を入れ込みました。そうでないと、学生はパワーがありますから、態勢が崩れても当たればいいという状況になっていく恐れがあります。

この「踏み込み足」が開発されていった歴史的な意味とその技術的内容の理解が指導の場に求められているのです。（Ex.豆まき道場、滑る床、一般体育館の床）

「先生は基本大事と手抜きする」とは、金賞を得た小学生の川柳です。その基本とは何かというと、踏み込み足打突と摺り足打突がきちんと一足一拍子でやれるということなのです。切り返しも素振りも、打ち込みも懸り稽古も技の使い方に至るまできちんとチェックしていくことが大切です。中身が抜けてはなりません。

以上の「斬突」から「打突」への身体技法の系譜を〈上肢（刀法）下肢（移動法）の分離と統合〉の過程として捕らえ、何が継承され、どのような新たな価値が創造されていったのかを知ることが大切です。でなければ、先ほどの川柳の状況から脱することはできません。高野先生の剣道は一つの近代化を象徴する手本です。これは、古流から現代の竹刀打突剣道へと移行する際、東京高等師範に11年間に渡って全国からの指導者を集め、一回6週間というものすごい労力を費やして近代教育の場に剣道をどう持ち込むかを研究されたわけです。そのメソッドを我々はあまりに簡単に受け入れ過ぎているのではないでしょうか。その過程で本当に苦労された問題を、例えば今お話しした踏み込み足打突や摺り足打突といった問題で考えてチェックしていくことが、上達につながることだと思います。それが、現場で待ち望まれていることだと思います。

(3) 剣道指導の再生を求めて -まとめにかえて-

指導の場面と競技の場面の問題をどう一体化していくのかというのは、今の剣道界が抱えている一大事です。国際化の問題も第二ステージに突入しました。競技団体として世界的にも認められているわけですから、今度はその傘下から独立して剣道が各国で競技種目として認められつつあります。国内での中学生や高校生、大学生の試合内容については、いろいろな問題が提起されています。当たれば結果として「一本」になってしまうという問題が、先に行ってしまう可能性があります。形の講習会をやったことがありますが、手順や「一本目」の理合はここだよ、というふうにやっていく形の学習と、今までお話ししてきたように素振りひとつ、太刀振り一つが本当にしっかりできるのかというという問題もあります。およそ九歩の距離をどうやって詰めるのか、それを何回も繰り返すとはどういうことなのか、その中で学ぶべきは何なのか。身体感覚や身体技法の問題を、構えを持ち運ぶ中で学ぶ必要があります。二歩目までと、三歩目でガッと行く時は違うのです。打ち合いのリアリティのつかみ方の問題もあります。呼吸法の問題もあります。「上虚下実」の中で自分の体を持ち運んでいく問題も、太刀さばきをやっていく中できちんとできて、対する二人の中で間が抜けない組太刀のリアリティを持つように、いつも二足のわらじをはいていなくてはならないのです。

ところが防具剣道の場合、本当は有効打突は過程を全部を見なくてはならないのに、当たってしまえば「一本」になってしまいがちです。これをどう考えるのか。指導の場面や競技の場面で考え続けなければなりません。歴史的に斬突から打突に変わった時、何を継承し、どんな打突文化の価値を作り上げてきたのか、今、その問題を考えなければならぬ時にきています。

いつの時代であっても、人間として「生まれ、生き、死んでいく」という営みは大変なことであったに違いありません。そして現在もまた、「自らを見失わず、ひとりよがりに陥らない」生き方が求め続けられてきているのです。

剣道は時代と共に「生死を賭けた場面」から「技を競い合う場面」へと、その戦いの場を移し変えてきました。そこにあって、剣（刀―木刀―竹刀）を持つ「敵を前において自己を創造する」、つまり《真の、自己の、いまの、ここの、精一杯のはたらきを鍛錬し、よりよい人生を創造する》という命題に変わりはありません。これが剣道の「本体」であり、「剣道理念」はこの「術を媒介として道の工夫をする」ことを言っているのです。日々の稽古および試合場面にあって、技を競い合い、勝敗を媒介として、自己の「からだ」に備わっている事（技）理（こころ）を解き進めていくことが、人間形成（自己の創造）に繋がることを示している。この「自らを耕していく剣」の指標が以下の①②③であり、同時に剣道の「競技特性」であると言えるのです。

① 双手剣の理 －「竹刀という剣」-

まずここでは、全剣道史（武術―武芸―武道）をすくいあげ、双手剣の理として結実させてきた「有効なる打突」を理解しておくことが必要です。「有効打突」は〈気・剣・体〉一致の技として大枠が示され、加えて「竹刀の打突部で打突部位」を「刃筋正しく打突」し、「残心あるもの」と規定され、さらに細かい「要件・要素」が補足されています。判定の立場を考えると、『打突結果』〈事実判断―的確な打突〉と、『打突過程』〈価値判断―どのような機会・間合で-どのような体・太刀捌きで-どのような手の内の作用で打ち切り、事後の備えをしたか〉という複眼的視点が重要となってきます。

空手の第一回世界大会が日本であり、審判が日本の審判で、腰からの体勢もきちんと決まっていて日本は完全優勝でした。そのような打突でなければ一本にしない審判でした。二回目の大会がパリであり、この時には世界の人たちが審判になりました。そうすると、当たれば判定が出てしまう。「これでは相手に致命的な衝撃を与えられないのではないか」といったものも一本になります。完全に足が地に着かないような状況で予選敗退しました。

この問題は剣道に置き換えてみると、非常に参考になります。国際化の問題では、空手は先行して苦労されている種目です。剣道は柔道に比べて競技化に際して非常に複雑な問題を抱えています。「当たればいい」とはならないために有効打突の内容が定められているのです。

剣道の打突攻防の織り成す時間・空間は、打突部位が四箇所もある上に、竹刀の動きが複雑かつ俊敏であり、しかも同時的・連続的です。また、「玄妙な技」にいたっては、単に技術性（運動の質・合理性）にとどまらない、自己の表現性（技術美と芸術美）の領域にまたがる問題をもはらんでいます。一瞬のうちに打突の有効性を判定するということは至難のわざなのです。この競技化難度が極めて高いという競技特性をしっかりと理解しておく必要があります。有効打突の問題は、みんなでしっかり深めて確認していく必要があります。これは、先輩方が本当に苦労に苦労をして考えてこられたものです。それを今日、我々がどういうふうに受け止めなくてはならないのか、ということなのです。

② 三世代性の文化 －「礼法」-

「子ども叱るな来た道じゃ、年寄り嫌うな行く道じゃ」とは弘法大師（空海）の教えです。この〈三世代〉というくくりの視点はとても大切です。剣道は生涯学習の老舗的存在として、「老若男女の共習・共導文化」の世界を形成してきています。つまり、世代、性差を超えて稽古交流し合い、ともに学び、教え合うという大きな特徴を持っているのです。さらに、死ぬまで成長し続けていく芸道・職人文化でもあります。この「老いてなお強し」の言葉に象徴される「わざ」と「こころ」の洗練・深化という熟練・熟達（質）の世界を形成してきているのもまた、もう一つの特長です。

このような視点で三世代性文化としての剣道の意義、さらには、それを社会文化現象として捉え直していく視点が、指導の場、競技の場を含めてますます重要になってきます。さらにはそれを社会文化現象として捉え直していく視点が今後ますます求められます。今、元立ちと掛かり手、打太刀と仕太刀の上下関係が非常に希薄になっています。互いに交代することは初心者指導や学校での指導では成り立ちますが、長い年月をかけて大事にしてきたのは、元立ち芸なのです。師匠に対して弟子が精いっぱいぶつかり、何がだめなのか、どこがだめなのかを、お互いに分かり合う。これが無くなったら、剣道ではなくなります。今の世の中と同じで、縦の関係が消えて横ばかりになってしまいます。三世代の共習・共導でありながらも、その中で打太刀、仕太刀といった「形」の中にある関係をどう防具剣道の中で守り続けていくか、今までこれを守り続けてきましたが、今はひょっとしたら守り続けられないところまで来ているのかもしれません。

先日、テレビを見ていたら、赤道直下の島でそれまで山の中で生きていた動物が海に入って海藻を食べるようになったというのがありました。それで最後にダーウィンの言葉が紹介されていました。この動物が強いのではなく、変化していく生き方を持っていたことが強い。我々は検証しなければならない問題はたくさんありますが、この時代、剣道の持っている文化的な内容や競技特性の中でどういうふうにこれからの人類社会に平和も含め、貢献していけるのか。そういうことを我々指導者は、これから考えていかなくてはならないと思います。検証ばかりでは息が詰まってしまいます。検討しなければいけないことは山のようにありますが、この要求に対する解は剣道がもともと持っている競技特性の中にあるのですから、この世の中で真価を問うための新しい創造をどうやっていくのかが、今、大事ことになってきていると思います。

昨日、ロシアの剣道をだいぶ面倒見てきた岡田さんの話がありました。橋本龍太郎杯が10回を迎えたそうで、ロシアも第ニステージに入ったとのことでした。これから、もっと剣道のすごさ、文化の内容をしっかり受け止め、開発しかねればならないとの話になりました。私は二回目の剣道選手権の時に全剣連から派遣されましたが、その時、もう亡くなられたヤコブレフという当時のロシアの会長がこんなことを言いました。「ロシアには残念ながら武の文化はなくなりましたが、幸いにも日本にはまだ残っている。この文化をお借りして、ロシアは武の文化を再興していきたい」とのことでした。

それをもう少し深く解釈すると、剣道のルーツが中国や韓国だと言っているレベルではないのです。双手剣の理として日本にこうして残っている剣道は、世界の剣の文化がなくなっていったものが、日本の剣道の中に凝縮されて残っているということなのです。日本人だけが残したのではない。これからは世界に対して、この文化を学んでどう豊かになるか、世界平和につながるか、など、日本から発信していかなくてはなりません。700年間、武士が治世していたのは、世界の中でも日本くらいなものでしょう。当然、治世者としての人間の教養もなくてはなりません。そのようなことが武芸として表芸としてやる中にも求められた問題があるのです。

世界が火器の最盛期に入っていた時、徳川家康は鉄砲を捨てました。そういう問題をノエル・ペリンはベトナムから帰ってきて、反戦の視点から核兵器廃絶という問題の中で「鉄砲を捨てた日本人の叡智を学ぶ」と論じています。世界から攻められても日本は丸腰

で、でも刀だけは持っている。その意味は、日本に武の文化、剣の文化が唯一残されていることです。先輩たちが心血を注いで残したものなのです。世界の剣の文化がなくなっていっても、その思いが全部凝縮されていると捉える視点が大事だと思います。

③ 東洋的身体論 －「生涯剣道」-

「双手剣の理」、「三世代性文化」を基底的に支えているのがこの「東洋的身体論」の世界です。老いて強さを保つものは自然発生的な体力ではありません。むしろ、年齢と共に衰えを示す体力、年を負うごとに完成度を増していく全身の統一と調和、まさにこの矛盾の真っ只中で、自らの身心が「どう在るか」ではなくて、「どう成るか」として探求され、技はますます冴えていくのです。しかもこのことが、自らの身体のもっとも合理的な働きを体得していくという現実的な営みに立脚したまま進行していくのです。近い将来、武道群の更なる普及と進展に伴って、国や世代を超えてこの東洋的身心論の重要性が認識されてくるに違いありません。

以上が、剣道の文化と競技の両面を巡る基本的スタンスであり、指導の場という問題はこのことと一体となって考えていかなくてはなりません。剣道の競技化が、単に近代スポーツという「乗合いバス」に乗り遅れないための口実となってはならないのです。剣道の競技化難度の大きさから見て、「有効打突」と「反則」の数量・ポイント化に着手するならば、それは剣道の持つ「競技特性」の放棄を意味し、「武道競技」とは異質の「競技スポーツ」になってしまうに違いありません。まさに、世界のどこにでもあるようなものを作るために、どこにもないものを崩してしまうこととなりかねないのではないでしょうか。

いま、改めて『競技化できないということを前提とした競技化』のあるべき方向性が求められています。各々の叡智を結集して、このことを推し進めていく時がきているのです。

ちょうど、世界大会の問題を考えると、みなさんの努力は精いっぱいでありましたが、今年は破れたわけです。そういう問題をどういうふうに考えるのか。競技文化の特性を、発信国として発信していかなくてはなりません。日本の剣道の組織は、一番試合が強いチャンピオンたちを中心にしてメンバーを構成しなくてはならないという懐の狭さに陥ってはなりません。そうではなく、負けたとしても50歳代が大将になり、そのような年齢構成を経て心・技・体の違いが歴然と見えるような仕組みを考えることに競技文化としての剣道の将来的な姿があるのではないでしょうか。そのようなことを提案し続け、発信し続けることが日本の剣道界の大きな役目ではないでしょうか。もう一度、みんなで考え直し、そこから剣道の競技文化の内容がこうあるべきということを考える必要があります。

剣道は、フィギュアスケートや体操のように難易度で数量化することのできる種目ではありません。剣道は、一瞬のうちに判定しなくてはならないのです。瞬間的に結果性と過程性を一緒に判定しなければなりませんから、これは判定ミスがあって当然でしょう。競技ができないことを前提にして考えていかなくてはならず、それが指導の場にも求められていると思います。

以上、棒読みも脱線もあり、伝え切れない部分もあったと思いますが、古流の問題、形剣道の問題、それらの身体技法の問題等を、大保木先生や小林先生にも伺いながら、私は竹刀剣道の中の身体技法の問題をここまで詰めていけば、打突と斬突という違いはあるけれど、かなりオーバーラップしてつながっているところが多いのだということをご提案申し上げて、終わりたいと思います。

杉江　ありがとうございました。我々が今、抱えている問題を竹刀剣道の立場からお話いただき、学会全体のテーマである国際化の問題にまで言及していただきました。これからの研究課題の方向性をお示しいただいたと思っています。先生の今までのお話の中で、言葉の意味などについての質問からいただき、先生のご発表についてのご意見を頂戴したいと思います。

質疑応答

杉江　学生さんもいらっしゃいますので、「はせ」という言葉の意味から伺いたいと思います。

作道　柳生新影流では、「はら」と「背中」は同量にならなければならないとされています。どちらかだけが緊張したのではだめだということです。横隔膜が下がり、下腹部が充実し、腰と肚が座ることを「ハセの一拍子」と呼ぶわけです。

杉江　他にも「これは学生さんには分からなかったのではないか」というのがありましたら、どうぞ。なければ、先生方から、講演についてのご質問を受けたいと思います。先生からアドバイスをいただく観点からでもけっこうです。いかがでしょうか。

浅見　岩手大学の浅見です。国際化によって世界に示していくという話でしたが、むしろ国内の少年剣道においては試合剣道中心に育てられている人たちがやがて大学生になりますので、その方がむしろ問題になるのではないでしょうか。崩れてでも勝てるので、勝てば満足してやめてしまう。あるいは、職について剣道を離れてしまう人も多い。指導の問題から勝ち負けにこだわる現状について、指導者の問題でもあると思いますが、ご見解を伺いたいと思います。

作道　答えになるか分かりませんが、日本の場合、三世代という問題がある意味でちゃんと生きている土壌があります。しかし、世界を見渡すと、年齢構成ではそうなっているものの、実質的にはそうなっていません。共産主義経済が自由主義経済に移行していった中で、少年剣道人口が増大している傾向もあるわけです。その中で、「基本大事」ということを、どのように指導できるのか。これから指導者の力量が問われるところだと思います。30〜35年前、剣道形を子供たちに教えるにあたり、連盟組織としてどう作り上げて共有していくのか、指導法の具体的な対象を設定した中で、もっと夢中にさせられるとか、ここだけ力を入れれば対処していけるとかの問題を、もう少し自分なりに考えていくようなことが必要なのだと思います。

都道府県の少年剣道が行われますが、去年、総務省や文科省などで地域活性化の観点で大阪が主管を務めました。準備の日程がなかった中でやりまして、今年で2年目になりますが、そこでは審判の講習を徹底してやりました。少年剣道の全国大会は、今、4つか5つあります。そこでは審判に立つ先生が、贔屓をすることが問題になっている。子供の「柔肌の剣心」を傷つけるようなことが平気でなされ、子供も大人も辟易しています。それを打破するためには、警察も教員も実業団も関係なく、段位も関係ない本当にやる気のある人を選出してもらい、自分達の錬成会の中で研鑽していくことが必要です。大阪では、審判の申し合せ事項も作りました。都道府県の剣道連盟に、大阪府の剣道連盟は審判の判定内容のここを大事にしたからこうやるんだというのを送ることができます。そのような中で、各都道府県剣道連盟の中の指導者とも、講習会で確認したことを共有しながら子供の大会を進めていくべきだと考えています。

子供の大会はどんどん増えますが、子供の剣道が全然良くならないのは、大きな問題だと考えています。大会を作るだけでなく、その審判をきちんとやることで、子供の剣道に良い機会になるよう、我々大人が考えていかなくてはならないと思います。責任を回避していてはいけません。そういう意味で、大阪体育大学も気分を一新してその取り組みをしたいと思っています。ぜひ、いろいろ見ていただいて、ご助言いただければありがたいと思います。

長尾　先生、ありがとうございました。今日の一番のテーマである刀法と竹刀剣道の接点について、せっかく大保木先生もいらっしゃいますので、シノギの削り方など、「ここが刀法と竹刀剣道の共通項だ」と捉えていいものがありましたら、お見せいただければと思います。

杉江　その時間も用意しているつもりではございますが、まず、先ほどの講演の内容についての質問から伺えればと思います。小林先生もいらっしゃいますので、いかがでしょうか。

小林　順天堂大学の小林です。抄録1頁目「斬突から打突へ」のところで、二つの典型を出されています。一つが摺り足打突ですが、日本剣道形を意識されているのか、それとも剣術一般の足使いを想定されているのか。私には、どうしても剣術一般の足使いを想定されているとは思えません。

作道　これは「有効打突を競い合う剣道」を断ってある通り、移動と打突の結合運動ということで申し上げています。剣術のところは武蔵の「歩むがごとく」ということを中心としながらすり足や飛ぶことなど、もありましたでしょうが、高足や跳ね足になってしまえ

ば崩れるのだということを抑えています。これは、今の防具剣道、竹刀剣道における足使いの二典型としてお話しました。

小林　すると、「斬突から打突へ」という主テーマと外れていくのではないでしょうか。

作道　私は、打突から紹介し、それを移動の問題と上肢の使い方との協調という目線で捉えた時に、打突運動においてこの二典型があることをご紹介し、踏み込み足が新しい足使いとしてあるなら、その中で古流の問題を連想してみてください、という言い方をしたと思います。古流においても、移動は下半身が請け負い、上半身が斬突を請け負い、その協調でうまくやっていくことに代わりはありません。その理の中で、斬突から打突へということを考える時に、私は打突から行きますよ、ということだったと思います。

小林　作道先生の竹刀稽古の視点からは分かるのですが、剣術そのものの足使いをこのようなすり足打突と捉えることは、非常に問題があるのではないかということなのです。狭義の捉え方では問題が多いのではないかなと思うのです。

作道　その通りですよ。ですから私は、これを「竹刀剣道」とお断りしているのです。

小林　ありがとうございました。

杉江　今の小林先生のお話は、ぜひ実演で古流における斬突の際の足使いというものを具体的にお示しいただきながら伺いたいと思います。ですが、作道先生が最後におっしゃっていたように、竹刀剣道でこのような修業をしていけば、最初に7〜8割は伝統的で、後の2〜3割は今のお話のような古流の足使いで、特に左足の踵の問題などは、たぶん、今は継承できない問題も含まれているのかもしれません。あと30分ばかりございますので、ぜひ実際にお示しいただきながら深めていきたいと思います。

　ここで5分休憩をはさみ、4時からおよそ30分間、実技を含めて深めていきたいと思います。

（実技　小林・大保木）

小林　・・・そのまま咽頭に付け振り上げていく。いつ突くか分かりません。ゆさぶられて最初に動いたら終わりで、私は清野先生にグッと入れられて勝手に振ってしまったこともあります。でも目と拳が動かなければ剣は降りないのです。切っ先を効かせていただくと、もっと伸びがでます。突き刺すようにするのです。これが一刀流の一本目です。

（実技　作道・大保木）

作道　足が全部こう上がるでしょう。床でやっていても地面を想定しているわけです。地面だと石やブッシュがあるから、そうでないと引っかかってしまいますからね。剣道の竹刀であれば、みなさんはもうお分かりのようにずらしをやりながらバンと踏み込む。この構えから発して構えに至る。

　踏み込みの問題も、左足が利き足にならなければ高段者になれないという話もあります。左足が「居つき足」になっているようでは、ダメだということです。それで初めて相手を攻められる構えや気持ちが充実するところまでいかないと、剣道にはなりません。小さくてもいいから、この移動の仕方、足の使い方ですね。送り込んでいくのか、打った後も送り足が大事で、どこに行くのかが全部決まる。点と線と面の問題がありますが、双手剣道の場合は、こうなるとお互い相打ちになります。相手が届くところは、自分も届く。相手が1で来たら、1で返せれば一番いいですよね。二挙動になっていても一挙動と思って踏み込んでいく。すり上げていくから二挙動になっているのか、それとも一挙動なのかということなんです。点と線、刃筋です。今はすり上げましたが、今度は返してみる。こうやって点が生きていて、線が来て、それを打つ。防御と攻撃が一緒になって、帰って来るのです。だから剣道形を教える時に、抜きの問題が1本目、2本め、7本目と三つあります。摺り上げが、5本目と6本目の裏表があります。返しはありません。刀を使った時に今の返しをやったら、ちょっとまずいかもしれません。そういう形の中で、点と線の問題をとらえ、刃筋が立ったこの点の中で相手が入れないようにする。面の使い方が今の摺り上げの中で、このように膨らんでいる。ここに行った線がこう回る。こういう点と線と面の使い方です。。点と線と面がいつでも竹刀と相手の攻防の中にあり、いつでもちゃんとした形になって生きているのです。

小林　私は清野先生にすり足のことを教えていただいたのですが、前に出すと、直接、理に勝てない。相手の中段をこうして相手の剣に勝って相手の理に勝つ。それを撃ち落したりすり擦り込んだり、巻いたりする。切り落としの場合は、これを崩すと先生はおっしゃった。砕いてくるので、それを受け手は切った。そのへんは現代剣道ではすぐに打てるでしょうが、突きを入れられている時にこんなふうになってしまうのは、当然の理で・・・

作道　現代剣道でも、相手の技を殺す、気を殺す、剣を殺すなど、いろんな見方があります。これは抑えていった時にこれに対して抑え返してバンといけるわけでしょう。あるいは、向こうが抑え返してきたら、こういけるでしょう。抑えに来てこのままだたら、こう行けるかもしれません。当然、相手のひとつの構え内容によって自分の面が行けるのか、行けないのであれば裏から払う。一番、払いやすいところに相手の剣を持っていったわけですから、払いやすい。このままなら俺の態勢なら行けるというなら、全部こういうところを無視して、相手の剣に対して自分の技を出していく時に、全部そういうことを考慮して技を出していく。

小林　例えば、脇構えは全部切れそうに見えますが、相手が切ってきたら、こう当たるようにする技があるわけです。合いには行けない。八相の構えも同様です。

作道　むしろ古流の方がこういう形があるわけです。ふつう、我々は全部全方向に使っているわけです。とにかく点と線と面というのは分かりやすい。相手の太刀を気で殺し、太刀で殺していって、どういうふうに天井まで運んでいくかですね。

杉江　その他、お話との関連で伺ったことをぜひ見せていただきたいですね。例えば、秋田で先生が示された「どうすれば跳ね足、高足にならないのか」という導入の部分です。一気にそこへは行かないわけだと思います。どういうふうに跳ね足や高足にならないようにされているのか。私が代表で一言、伺いたいと思います。

作道　例えば、遠いところへ自分の体を行かせようとすると、抜けますね。本当は遠いかもしれないけれど、遠いやつを自分が本当の体としてグウーッと入れ込んでいって近くで打つ。自分の体がどう打っても近くになるように自分の体と気をそこまで運んでいくということが技を出す前の「勝って打つ」とか「攻め合う」とか「気競り合い」とか、間をどう詰めるかという部分ですごく大事なことだと思います。

　この前やった時には、みんな学生は遠くを打てると思っている。だからこうなってしまうのだから、少し間を近くして、自分の左のつながりをこうしていって、ハセ一枚にして、それを左膝に乗せる。それでまっすぐに構えると左の肩が引ける。すると、左のつながりが出てくるから、この形の中でそれをまっすぐ前に振りかぶって出ていく。膝から入れていき、バンと打つ。これを何時でも変えない。それが竹刀でいく時のひとつの大事な点です。それが出来ていても、自分たちは早くやろうということで一生懸命やっているから、お互いに軸が少し傾き合って腰が抜けながら高足の形になります。そうならないように近いところをきちっとバンとやる。それも焼き直しをしながら技を練習していく。それは当てこましの技だろう、そうじゃないよな、その当てこましをしてきたら、俺には全然通じないよな、というわけです。当てこましじゃないと言われたら、すごいパワーもスピードもあるわけですから、ちゃんとできるようになる。

杉江　ありがとうございました。私もあまり小学生を指導したことはありませんが、今のような良い示範を見れば、子供たちにはすぐに移るのです。難しくいかず、良い示範を見せられれば、子供はイメージで覚えてしまうものです。そこに子供の良さがありますね。私はなかなか先生のようにうまくできませんので、もう少し分解的に教える良い方法がないものかと思ったのですが、やはり真似をさせるというところの「真似ぶ」が良いと拝見しました。他に、ありませんでしょうか。先生にやって見せていただきたいというようなことがありましたら。

作道　今のは佐藤先生がご専門の発達の問題ですね。小学校高学年のゴールデンエイジじゃ、即座に学習でき見ただけですぐできる。その時期を逃したら、こういう巧緻性の大事な剣道とか体操の種目であっても、もうだめですね。歳とってやると、どこかぎこちない。でもそういう人たちに一足一刀のリズムをちゃんと身に付けるように指導していくのは、相当に困難なことです。小学校の高学

年を逃さないというのが、非常に大事なことですね。

杉江　ありがとうございました。今日の話の中で、踏み込み足、「動的閉鎖環」ということが指導に生かせるのではないかと思いながらお聞きしました。実際の踏み込み足の指導で、この考えをうまく展開するにはどうしたらよいのか。これは高いレベルの技術なのか、それとも初心者のレベルからにも指導できる技術なのか、そのへんのところをお願いします。

作道　これは、例えば授業の中でやっていくときに、このように下げておいてバンと、ひとつのリズムみたいなものはマスターさせながらもう一度説明をして、「こうなるよね、そうすると軸がずれないよね」というふうに解説もしてあげなければなりません。そういう意味では、あの手この手を使うのですが、それでも「動的閉鎖環」という言葉で説明した時に、自分たちは本当にパチンと腑に落ちたような気がしたんです。ああ、開いて行っているんだから、そうじゃなくてバンと、これが「動的閉鎖環の形成」と言った時に、ああそうなんだ、ここでこういうふうに足首を返して膝から持って行けば、バンとなる。これが決まっていれば、質のところですね。これは分解的にやるとかいろんな試みがあるかと思いますが。

杉江　それは初心者の時にうまく展開し、カンのいい子はすぐにそれができるということですね。ありがとうございました。

作道　ここから、このままでは難しい。今のように慣性力を包みながら当ててバンとやる。そこから今度、一歩すっと入って行ってそのままの形で出て行く。

吉村　踏み込み足ということですが、一般的に学生や子供たちがよく使うのに、「飛ぶ」という表現があります。指導者もよく「飛べなくなった」と言います。先生ご自身は、「飛ぶ」ということをどういうふうに捉えておらえますか？。私自身はあまりそのようには使わないのですが。

作道　埼玉の大久保先生は、「踏切足」という表現をされました。そのように言っていたこともあったようです。この膝に、自分のハセを一枚にして乗っけて行かれるかどうかが非常に大切なところです。これがこうなったりしていると、こう飛ぶことではない。左膝にハセ一枚になったものを乗っけた形の中で、前に腰を運べるかどうか。それを「左本体」と言ったのであって、右足がそれを一番いい形でリードしていくにはどうしたらよいかを考えた方がいいということなのです。

吉村　ありがとうございます。私たちは用語と技術指導ということで、言葉使いにはもっとこだわっていかなければいけないと先生がおっしゃったように、片足の軸足をきちんと作って、そこに重心をきちんと乗せて前に素早くパッと運んで行き、それによって基軸を崩れない動作ができるということですね。それを言い方として「左足で振み切って飛ぶ」というのは、どうなのだろうと思っていましたので、お聞きしました。ありがとうございました。

杉江　あともう一名受けられると思います。いかがでしょうか。

大保木　お尋ねしたいことがあります。背骨を軸とした左右の回転運動に伴う剣の操作についてです。古流では、右前半身か左前半身に構え、「真っ向くは悪し」といわれています。新陰流も一刀流も絶対にこれをやってはいけないとされていますが、ある時代から真っすぐに向く、つまり正対するようになりました。防具剣道のさきがけとなった直新影流の「法定」はキチット「正対」させるようにしています。

体軸の回転から来る剣の操作は、すり上げ技の場合、相手の剣に対し半円を描くようにすり上げるのではなく、右斜めに構えた剣を上に並行移動させてできる面で相手の剣を迎えるようにこうすり上げていって、落とすことになっています。自分の軸回転を中心とした動きを大事にした操作があったと思います。現代は直線的になりましたが、技を極められている先生方は、ここを大変上手に使っておられます。剣道形に示されている6本目の小手の返しと、5本目の面の表の返しを、講習会などでは、鎬でコーンと摺り上げるのと、この回転を使って摺り上げるのと、二通り示されますが、その点はどう整理をすればよいのでしょうか。

作道　たぶん、今の剣道ではこういうことはやらないと思いますね。直線だと思います。そうやっていると間に合わないという意識からだと思います。同じすり上げ面であっても、相手が打ってくるのに対して、平行移動で捌くというのはありますね。後ろに引いてしまうのはとても少ないです。前へ出て行くにしても、自分の足の運び方を直進的な形の中で気をつけてやるのが現代の防具剣道のやり方です。いわゆる、体の軸回転の動きの中で、これをやるわけです。こういった時に、今のやりかたですと、右足を開く中で、腰の回転で切り抜ける。胴の場合は、小手や面に対して、軸の回転そのものはこうなります。

杉江　小林先生、一刀流で現代剣道みたいに下から振りかぶるように摺り上げるというような技はありますか？

作道　剣道形の五本目をやってから、一刀流のをやってみてください。そうすればよく分かりますから。

小林　右肩を、半身を立てるように体全体で行くんです。それで、完全に相手が回復できないようなフルボディの払いをこのようにして、こう完全に来て、その後勝つ。あとは、例えば相手がサッと斜めに小手を切ってきたら、流す。これで勝つ。これは、槍もなぎなたも小太刀も同じなんです。すり込みをやる。全身で剣の動きを作り、剣の上下運動と背骨を軸とした回転運動でできる面で、相手が来たのを防いでから勝つ。

作道　もう一度、一刀流のすり上げをやってみて。

小林　こういう感じになります。このまま下ろしてもいいし、これでも間に合うようにいく。ドーンとこれで行けるんです。忙しく打たないで、完全に勝っておいて相手につけ込む。

作道　昔、一刀流の人と稽古をすると、ここがうるさくて。「あんまり触るな」と思ったものですが。

小林　それはこう引いたりいろいろありますが、例えば剣道形の3本目はこうやって出て行って、この打ち間に入って上げるということはないんです。必ず、こうやって間の外に行って、入った瞬間にこうする。打ち間に入って上げるのは、危ない。どうやって間境というか、その外から行くか。その瞬間、相手が切ってきたら応じて、隙あらばツカツカと進む。そこが重要なところなんです。

作道　1、2歩目と、3歩目は違うんですね。

小林　後は、このように八相に構えたら、この筋で打ち込む。あるいはこちらの裏の方で。あるいは脇構えも、反対もあります。場面によって、現代剣道ではほとんどないことをやる。ですが、『五輪書』に書いてあるいわゆる「きっさき下がり」になったら、すごく威力がある。これは、袈裟切りのこういう一部を作っていると思われます。そうすると、小さく入れても威力がある。例えば、斜め打ち下ろす。それで、八相があったり脇構えがあったり、時にはこういう素手でやる。多様な切り方をやって、最後に真っすぐな一打ちをやる。真っすぐな一打ちを会得したいんだけれど、それだけではいけない。左右が十分できて、先生の先ほどの「全き一打ち」に行き着くということなんです。何でもできるが、最後は一打ちでやる。ですから、今日の作道先生の竹刀打ち剣道の重要な部分は、古流はほとんど稽古されていないとのことでしたが、私が感じるところでは、古流の重要な部分を全部言い当てられている。その感性たるや、恐るべきものと敬服しております。

杉江　それでは、作道先生、最後にまとめていただきたいと思います。

作道　僕より、加藤先生に「指導の心構え」について、良い機会ですので是非お願いし、しめとさせていただきます。加藤先生、よろしくお願いいたします。

加藤　作道先生は非常に分かりやすく、刀と木刀と剣の三つをどう使っていくかについて説明について、お話くださいました。まず、持ち方が違いますね。刀は巻き詰め、木刀はイッパイ、竹刀は半ガケというよう指導をされていると思います。それが、その獲物を操作するのに一番ちょうどよいと思います。先ほど大保木先生とやられた新陰流の「合撃（がっし）打ち」、一刀流の「切り落とし」、あれがひとつの極意です。今、見せてもらいましたが、体軸の使い方などを、これからの指導法の中で子供を指導していく時に、今の竹刀をどのように集中力を指導しどうしていくのか、これから皆さんと一緒に指導法の中でいかに子供たちを真剣にさせるか、それを一番大事に考えていきたいと思います。

私が言うことではないのですが、指導法のことで一年半、お互いに議論しながらあのように出てきたわけです。今度はあれを具体的に自分に向かって来る剣と、相手に向かって行く剣と、それをどう意識させ、刀の観念に結び付けて指導していくか、それが伝統的文化なのではないかと思います。日本人が培ってきたものを、どのように世界に広めていくのか。単なる当てっこではなく、三世代できるというところの狙いが、剣道の深さではないかと思います。これからも、よろしくお願いします。

杉江　ありがとうございました。もう２時間になろうとしています。この倍ほどの方々にぜひ、聴いていただきたかったです。この講演会につきましては、会報やホームページでより多くの方々に伝えて行っていただくことをお願いして、閉会といたします。作道先生、ありがとうございました。会場のみなさん、ありがとうございました。（拍手、了）

平成18年度　剣道専門分科会　一般会計決算書　（平成18年4月1日～平成19年3月31日）

1.収入の部

科　目	予算額	決算額	差異	摘　要
1 会員会費	200,000	140,000	60,000	14年度分1口、15年度分2口、16年度分2口、17年度分10口、18年度分55口
2 本部助成金	50,000	50,000	0	学会本部より助成金
3 前年度繰越金	326,539	326,539	0	平成17年度からの繰越金
4 利息	0	187	△187	分科会口座預金利息
当期収入合計	576,539	516,726	59,813	

（単位/円）

2.支出の部

科　目	予算額	決算額	差異	摘　要
1 研究助成費	60,000	70,000	△10,000	分科会企画謝礼、テープ起し
2 広報活動費	100,000	0	100,000	
3 印刷・消耗品費	40,000	9,609	30,391	事務用品等
4 通信費	50,000	27,980	22,020	郵送代、切手・はがき代等
5 会議費	15,000	0	15,000	
6 交通費	100,000	2,000	98,000	役員交通費
7 傭人費	50,000	15,000	35,000	事務局アルバイト、研究会アルバイト
8 予備費	161,539	0	161,539	
9 次年度繰越金	0	392,137	△392,137	平成19年度への繰越金
当期支出合計	576,539	516,726	59,813	

（単位/円）

監査の結果、適正であることを証明いたします。

平成19年　　7月　　31日

日本武道学会剣道専門分科会監事

浅見　裕

袴田　大蔵

平成19年度　剣道専門分科会　一般会計予算書（案）（平成19年4月1日～平成20年3月31日）

1.収入の部

科　目	予算額	前年度予算額	差異	摘　要
1 会員会費	200,000	200,000	0	2,000円×100口
2 本部助成金	50,000	50,000	0	学会本部より助成金
3 前年度繰越金	392,137	326,539	65,598	平成18年度からの繰越金
当期収入合計	642,137	576,539	65,598	

（単位/円）

2.支出の部

科　目	予算額	前年度予算額	差異	摘　要
1 研究助成費	100,000	60,000	40,000	第39回大会分科会企画、研究会の助成金
2 広報活動費	100,000	100,000	0	広報活動への助成
3 印刷・消耗品費	50,000	40,000	10,000	コピー、事務用品等
4 通信費	50,000	50,000	0	郵送代、切手・はがき代等
5 会議費	15,000	15,000	0	会議費
6 交通費	100,000	100,000	0	役員交通費
7 傭人費	50,000	50,000	0	事務局および広報活動におけるアルバイト
8 予備費	177,137	161,539	15,598	
9 次年度への繰越金	0	0	0	次年度へ繰越
当期支出合計	642,137	576,539	65,598	

（単位/円）

※　上記は、平成19年8月31日、東海大学高輪校舎において開催された総会において承認されました。

事務局だより

〔平成19年度総会報告〕

◎平成18年度事業報告

１．総会の開催

平成18年9月7日(木)15:10～15:40、国士舘大学多摩キャンパス201教室において総会を開催した。

２．指導法研究会の開催

平成18年9月7日(木)15:40～17:10、国士舘大学多摩キャンパス・ダンス場において指導法研究会を開催した。

講師：加藤浩二先生
（東京都剣道連盟常任理事）

テーマ：第1回東京都形剣道大会報告
－実施の経緯と今後の課題－

３．研究会の開催

平成18年12月22日(金)17:00～20:00、早稲田大学人間総合研究センター分室で開催された「早稲田大学スポーツ文化研究所研究会」において、大保木輝雄当会幹事長が「剣術・撃剣の身心技法」と題し発表を行った。早稲田大学スポーツ文化研究所のご厚意により、同研究会への剣道専門分科会員の参加許可を得、これをもって平成18年度の研究会にかえた。

４．幹事会の開催

平成18年5月27日（明治大学）、7月8日（工学院大学）、11月23日（工学院大学）、および平成19年3月24日（明治大学）の4回、幹事会を開催した。

５．広報活動

会報「ｅｓｐｒｉｔ」第5号を発行した。また、他学会の研究会情報等を、当分科会ホームページ上で紹介するなどして、広報の充実を図った。

６．会費の徴収

平成18年度分の会費を徴収した。18年度の会費納入状況は、17年度に比して48,000円（24口）の収入減であることが19年度総会において報告され、会費納入への協力を呼びかけた。

◎平成19年度事業計画（案）

１．総会の開催

平成19年8月31日（金）
東海大学高輪校舎

２．分科会企画・指導法研究会の開催

平成19年8月31日（金）
東海大学高輪校舎

３．研究会の開催

期日：未定
場所：明治大学駿河台校舎
演者：佐藤宏拓穣会員（国士舘大学）

４．幹事会の開催

本部理事会開催日に幹事会を行う。
年4回。

５．広報活動の活性化

剣道アーカイブの更なる充実。他学会及び海外研究機関との情報交換。

６．会報６号の発行

７．会費の徴収

※上記の事業報告および事業計画(案)、および前頁の決算・予算（案）が、平成19年8月31日、東海大学高輪校舎において開催された総会において、承認されました。

〔㈱東京堂出版『剣道を知る事典』進捗状況報告〕

19年度総会において、㈱東京堂出版との共同事業、『剣道を知る事典』の刊行と、監修委員案、編集委員案が了承されました。その後、編集委員会において８回に亘って編集会議を開き、このほど執筆項目案と執筆候補者案が確定しました。今後は、５月中に執筆依頼をし、８月３１日を期限として原稿を取りまとめ、リライト・校正を経て、平成２１年３月末日刊行、という予定で進捗しております。

〔平成20・21・22年度幹事選出選挙結果報告〕

平成20・21・22年度幹事選出選挙（10名）を、20年3月5日を締め切りとして実施し、3月6日、工学院大学において選挙管理委員立会いのもと、開票作業を行いました。投票総数46通、うち有効44通（5名連記のみ有効）、無効2通、有効票計220票で、結果は、以下の通りでした（敬称略）。

長尾　進　22票、数馬広二　19票、大保木輝雄13票、酒井利信13票、百鬼史訓13票、横山直也10票、植原吉朗9票、中村民雄8票、湯浅晃8票、山神眞一7票、次点・香田郡秀6票（5票以下略）

正式には、本年8月開催の総会においてお諮りいたしますが、今後の予定としては、前例にしたがい5月開催の幹事会において会長推薦幹事（若干名）・監事（2名）等を選出したうえで、新体制で実務に当たらせていただく予定です。宜しくご了承のほど、お願いいたします。

〔平成20年度分科会企画フォーラムのお知らせ〕

平成20年度の分科会企画フォーラムは、8月30日（土）の午後に、慶応義塾大学において開催の予定です。講演テーマ、および講師については、現在幹事会において検討中です。追って、ご案内を差し上げます。

〔事務局変更のお知らせ〕

3月29日開催の幹事会において、事務局を明治大学（長尾幹事）から工学院大学（数馬幹事）に変更することが了承されました。これに伴い、現在新規口座等を開設中ですので、平成20年度の会費納入につきましては、別途ご案内を差し上げます。

以上

日本武道学会剣道専門分科会事務局

〒168−8555 東京都杉並区永福1-9-1　　明治大学和泉校舎研究棟・長尾進研究室内

TEL 03-5300-1156　　FAX 03-5300-1203

E-Mail：nagao@kisc.meiji.ac.jp　　分科会ＨＰ http://www.budo.ac/kendo/